

「諸人」の景

——『六百番歌合』『元日宴』を起点として——

谷 知子

一 『六百番歌合』の「元日宴」

建久三年、藤原良経の主催による『六百番歌合』が企画された。この歌合の題は従来の百首歌の題とはかなり異なったもので、百題のうち五十題は四季題、残りの五十題は恋題という構成をとっている。この題の決定については、主催者の藤原良経を中心にして、藤原定家や出入りの六条家の歌人たちも関わったと見られている。

『六百番歌合』の百首題の冒頭は、「元日宴」の題である。十二名の参加歌人の一人であり、主催者でもある藤原良経は「元日宴」題を次のように詠んだ。

あらたまの年をくもゐにむかふとてけふ諸人に御酒たまふなり⁽¹⁾

(良経)

この歌は一番左の歌であり、まさしく『六百番歌合』の巻頭に位置する。しかし、この歌に対する俊成の評価は芳しくない。俊成は判詞において「下句、『御酒たまふなり』といへるや、無下にただこと葉に侍らむ」と、末句が「ただこと葉」である点を非難している。⁽²⁾ 一番左に置かれた主催者の歌であるにもかかわらず、勝負は「持」とした。「酒」という語をそのまま詠みこんだうえに、「御酒たまふなり」というのがあまりにも歌ことばとして工夫がなさすぎる、日

常的すぎるということであつたのだろうか。

そもそも「元日宴」の「宴」の本意は、神もしくは天皇から下賜される酒にあり、題じたいが酒と強く結びついた正月行事であり、酒を排除する傾向にある王朝和歌とは相容れない性格を孕み持っている。顕昭陳状に「元日宴」、初て被二出題「侍也」とあるように、歌合史上前例のない歌題であつたのはそのせいであろうか。⁽³⁾ただし、歌合以外、例えば屏風歌などには詠まれた前例はある。

あるところの御屏風に、正月、せちする

はるがすみたつといふひをむかへつつとしのあるじとわれやなりなむ

(忠見集・三九)

内の御屏風四帖わか 春正月えする所

あたらしき年のはじめにあひくれど此春ばかりたのしきはなし

(兼盛集・一五四)

この二例はいずれも元日宴の風景である(『忠見集』の方は私宴か)が、宴の具体的描写はない。ただ、前者は「あるじ」、後者は「たのしき」が、「宴」の意を表現しているのだらう。⁽⁴⁾

『六百番歌合』「元日宴」題では、参加歌人十二名中前掲の良経詠を含めて六名(ただし季経詠は酒より広幡の衣の方に中心があるかもしれない)が賜酒を詠んでいる。

もししきや春をむかふるさかづきに君が千とせのかげぞうつれる

(慈円)

たちかはるとしのしるしは豊御酒にかさねてたまふ広幡の衣

(季経)

諸人のたちある庭のさかづきにひかりもしるし千代の初春

(家隆)

いつしかと袖をつらぬるもしきによろづよめぐる春のさかづき

(隆信)

もししきや袖をつらぬるさかづきにゑひをすゝむる春のはつかぜ

(寂連)

慈円・家隆・隆信・寂蓮は酒を「盃」と表現しており、「御酒」という直接的な語を用いたのは良経・季経のみであ

る。みな、宴を表現するのに苦心している様子が窺えて興味深い。

「御酒たまふなり」が「ただこと葉」であるとして批判の対象となつた良経詠において、逆に非常に晴儀的な、非日常的な役割を果たしているのが、「諸人」の語である。良経の家集『秋篠月清集』に「諸人」の用例は、前掲の『六百番歌合』『元日詠』以外に四例ある。

おしなべてけさはかすみのしきしまややまともろ人春をしるらし
（秋篠月清集・八〇〇・千五百番歌合・春）
たちそむるくもゐの春はもろ人のそでをつらぬるにはに見えけり

（秋篠月清集・一三三九・任子入内屏風和歌・「小朝拝列立の所」）
さよふけてとよのあかりのもろ人のをとめむかふるくものかよひぢ

（秋篠月清集・一三六九・任子入内屏風和歌・「五節参入の所」）
たびのよにまよふもろ人こよひこそいでしみやこの月をみるらめ
（秋篠月清集・一六〇八・釈教・「旅」）

「おしなべて」詠は『千五百番歌合』の一番、「たちそむる」詠も『任子入内屏風和歌』の一番である。先掲の『六百番歌合』詠の一番左を合わせると、良経の「諸人」の用例五首のうち三首は、百首歌の巻頭歌に用いられているのである。一番ということはずまり元日の歌ということでもある。『六百番歌合』詠と『任子入内屏風和歌』詠は、元日の行事において宮中に集まる公卿たちの風景、『千五百番歌合』詠は、日本の国土に到来した春を、霞がしく風景によつて万民が知るといふ歌である。一三六九番歌は詞書に「五節参入の所」とあり、五節舞の絵に対して詠まれた屏風歌である。これもまた晴の儀式の歌である。「諸人」の語が、一人の天皇に対する群衆としての公卿を表すのに対して、六〇八番歌の「もろ人」は唯一無二の仏に対する衆生である。

こうした「諸人」の語が元日や節会という晴れがましい機会を詠んだ歌に集中して用いられるという傾向は、実は良経一人に限らない。後述するが、和歌における「諸人」の用例は数多いが、その大半が晴儀の場の歌に集中して用

いられているのである。「諸人」とは万民、民衆、貴族など、いずれも群衆を意味する言葉である。「大宮人」と近い意味に用いられることもあるが、数の多さと、一人も残さず遍くという点で特徴的である。本稿では、あくまでも和歌に限って、歌ことばとしての「諸人」がどのように用いられてきたかを探ってみたい。また、四章で後述するが、「諸人」は『堀河百首』あたりから用例が増えはじめ、新古今時代に急増する傾向を見せる言葉でもある。それはどうしてなのか。その背景についてもできうる限り迫ってみたい。

二 『大嘗会和歌』と「諸人」

「諸人」の語が果たす役割を考えるために、突出してその用例が多い和歌の催しに注目してみよう。その典型的なものの一つに、大嘗会和歌がある。大嘗会和歌とは、大嘗会の儀式において歌われる風俗和歌と、宴を飾る屏風絵に付けられた和歌とを指す。⁽⁵⁾時代が下るにつれて、悠紀・主基各風俗和歌十首、屏風和歌十八首と定形化され、選ばれた国の地名に寄せて詠まれるようになる。かなり特異な性格を持つ和歌であり、祝祭性の強い作品群といえよう。現在残されている大嘗会和歌には、「諸人」は十一首の用例を見ることができ、風俗歌が七首、屏風歌が四首である。

まず、風俗歌（辰日、巳日の狭義の風俗歌）の用例七首を掲げてみよう。

風俗歌

退出音声 安良郷

諸人の願ふ心に近江なる安良の郷のやすらげくして

（大嘗会和歌・一二三四・三条院・悠紀方・近江国・大中臣輔親）

巳日参入音声 深井郷

天下君に仕ふる諸人は深井のさとのふかき心あり

「諸人」の景

樂急 まへだのさと

(大嘗会和歌・二九七・後一条院・主基方・備中国・善滋為政)

としつくりまへだのさとの諸人は秋のをさめにとみくさぞさく

(大嘗会和歌・三〇六・後朱雀院・悠紀方・近江国・大中臣輔親)

巳日参入音声 歌撫村

歌撫乃 村爾諸人 万登井之天 治礼留世能 声乎聞賀那

(大嘗会和歌・五二〇・白河院・主基方・丹波国・大江匡房)

辰日参入音声 神井山

諸人乃 伊能留与己止盤 賀奈井山 山乃峽〔 〕〔 〕二毛安留加奈

(大嘗会和歌・七二二・六条院・主基方・丹波国・藤原永範)

同日樂破 新居郷

もろ人のにひるのさともにぎはひてとよのあかりにあふがうれしさ

(大嘗会和歌・七五五・高倉院・悠紀方・近江国・藤原永範)

辰日参入音声 立入村

をさまれるみよをかしこみもろびとのけふひきつれてたちいりのむら

(大嘗会和歌・一一七〇・後嵯峨院・悠紀方・近江国・藤原親光)

それぞれの歌において、「諸人」はどのような役割を果たしているのだろうか。一首一首における「諸人」の働きを見てみよう。

「安良郷」の歌では、その土地の名どおりに、「安良郷」は安穏な地であると讃えられる。もちろんその背景に、天

皇の徳政への壽ぎがあることは言うまでもない。例えば、

やすみするわがおほきみのみよにこそいとどやすらのさともとみぬれ

(顯輔集・一一一、大嘗会和歌・近衛院・悠紀方・近江国「安良郷」)

何事もゆたのたゆたにおほくのみやすらの村のやすらけきかな

(大嘗会和歌・四二二・後三条院・悠紀方・近江国・「安良村」・藤原実政)

名爾之於倍者 安良乃村爾 家居之弓 治礼留世仁 逢曾宇礼之伎

(大嘗会和歌・六〇六・後白河院・悠紀方・近江国・「安良村民家旁多」・藤原永範)

なども、「安良」の地名に掛けて安らかな治世を壽いだ歌の例である。いずれも「安良郷」の安らかさ、繁栄を讃えつつも、その因は徳政にあるとして壽ぐのである。そして、「諸人」は安らかな世を「願ふ」安良郷の民衆である。

「深井郷」の歌では、「深井」の地名から、「ふかき心」が導かれ、「諸人」は「ふかき心」をもって「君に仕ふる」存在であるという。「諸人」は深井郷を象徴する存在であり、「諸人」の心を讃えるという行為が、その土地の讚につながる。ここでも衆としての「諸人」が向かい合う相手は、個としての天皇である。

「前田郷」の歌では、地名の「前田」にちなみ、農耕が歌われている。「としつくり」は稲作、「秋のをさめ」は秋の収穫である。「とみくさぞさく」の「とみくさ」は、稲の異名としても用いられることばであるが、ここでは秋の収穫を予祝する花のことであろうか。⁽⁶⁾そして「諸人」は、豊作を願いつつ、農耕を営む前田の郷の民衆を指す。「諸人」の行為が豊作、ひいては世の繁栄につながるのである。

「歌撫村」の歌では、地名の「歌撫」が「歌」による「撫民」という意味に転じて讃えられているのではないか。八木意知男氏は、風俗歌では聴覚の領域に関わる地名が用いられることが多いと指摘しているが、⁽⁷⁾この例などはまさにその一例であろう。「歌撫村」の「諸人」は団居して治世の歌声を聞いている。おそらく歌を聞きつつ安らかに治めら

れる民の姿を、「諸人」が体现しているのである。つまり「諸人」は穏やかな治世の証言者としてそこに存在している。

「神井山」の歌では、「諸人」は祈りを捧げる人々で、その祈りは「神井」の名のとおり、かなうとされる。同じく『大嘗会和歌』の

祈留事 賀奈井乃山乃 左根賀津良 久礼止毛不尽奴 与裳乃民賀那

でも、「神井」が祈りがかなうの意味に詠まれている。
(大嘗会和歌・五一九・白河院・主基方・丹波国・風俗和歌・「神井山」・大江匡房)

「新居郷」の歌では、「新居」が「にぎはひ」を導く。この「にぎはひ」の語もまた、大嘗会和歌に頻出する語である。その中から二首を例に掲げよう。

とみの山ふもとのさとを見わたせばたみの家居ぞにぎはひにける

(大嘗会和歌・五七八・堀河院・主基方・備中国・屏風和歌・「富山下民戸多連」・藤原行家)

けぶりたつやすらのむらのけしきこそみとせもまたでにぎはひにける

(大嘗会和歌・六三九・二条院・悠紀方・近江国・風俗和歌・「安良村」・藤原俊憲)

「にぎはひ」ものは、五七八番歌では「家居」、六三九番歌では「けぶりたつやすらのむらのけしき」である。以下、歌の引用は省略するが、「にぎはひ」とされるものは、早苗取る田(七六四)、朝餉の煙の立ち上る村(八〇二)、民のかまど(八〇九)、民の家居(九一九)、民のかまどの数がふえる里(一一七五)、貢物の多い里(一一二二)である。こうして見ると、「家居」をはじめとして、その土地が賑わう根拠となる景物は全て民の象徴となるものである。そして民の賑わいが、ひいては世の繁栄の寿ぎを表している。その典型的な例が、

たかき屋にのぼりてみれば煙たつたみのかまどはにぎはひにけり

(新古今集・賀・七〇七・仁徳天皇)

であろう。「たみのかまど」は人家の喩であり、「にぎはひにけり」は富む、豊かになるの意味である。「にぎはふ」の語は、数の多さが世の繁栄を象徴する風景を表し、ひいては寿ぎにつながるという点で、「諸人」が果たす役割に近い。このほか、「八十氏人」などの語も、「諸人」と同じ役割を担った言葉であろう。

君が御代長村山のさかき葉を八十氏人のかざしにはせん

(大嘗会和歌・二三八・三条院・主基方・丹波国・神楽歌・「長村山」・源兼澄)

「立入村」の歌では、治世の証として、「諸人」は「立入村」の名のとおりはその村に連れだつて立ち入るのである。「諸人」で賑わう村は、治まれる世を具現している。

以上が、風俗歌における「諸人」の用例である。群衆としての人民に対峙する個とは、天皇である。「賑はふ」「諸人」の指し示す方向の行く先には、個としての天皇が存在しているのである。その天皇が治める世の平穏と繁栄を証しだてるために、群衆が描かれる。しかし、その描かれ方は観念的で、かつ類型的であり、具体性や多様性に乏しい。実体を伴わない、顔の見えない群衆の数だけが強調され、その群衆が穏やかな治世、世の繁栄を証立てる象徴として、重要な役割を担っているのである。

次に、屏風歌の「諸人」の四例を掲げよう。

万歳井有ニ汲レ水人一

君が代に諸人の汲む万世の水はつきせぬいは井なりけり

(大嘗会和歌・四〇五・後冷泉院・主基方・備中国・仲秋・藤原家経)

山吹崎款冬開敷遊人翫レ之

山吹のさきにもろ人まとみしてこがね花さく色をこそ見れ

(大嘗会和歌・四二六・後三条院・悠紀方・近江国・三四月・藤原実政)

長尾山多二行旅人^一

諸人能 坂行久路波 長尾山 万多行須惠曾 遥奈利計留

(大嘗会和歌・五〇三・白河院・主基方・丹波国・五六月・大江匡房)

高円郷村人摘^レ花

とみくさをてにつみもちてもろ人のふりはへゆくやたかみやのさと

(大嘗会和歌・八七四・後鳥羽院・悠紀方・近江国・三四月・藤原季経)

「諸人」の景

いずれも詞書に、万歳の井の水を汲む人、山吹崎にて遊ぶ人、長尾山を行く多くの旅人、高円郷の花を摘む村人とあり、それぞれの土地に人物が配されているという絵柄であったことが推測される。しかし、詞書の表記はいずれも「人」である。「長尾山」詠については「多」の字があり、多数の人が絵に描かれていたのかもしれないが、その他の屏風絵の実際については不明である。屏風絵じたいに多数の人が描かれていたのかもしれないし、絵には一人、二人しか描かれていないのにそれを「諸人」と表現したのかもしれない。或いは絵を見ずに与えられた詞書のみによって詠んでいたとしたら、詞書の「人」を「諸人」と表現したのだろう。

「万歳井」の歌では、「諸人」は万歳の井の水を汲む人々である。そして、その土地の名のとおり、どれほど多くの人々が汲んでも水が尽きることのない「万歳の井」であるとして、治世を寿いでいる。

「山吹崎」の歌では、「諸人」は詞書の「遊人」に相当する。山吹崎に団居し、山吹の花を黄金の花と見立てる人々である。「まとゐ」の語は先の風俗歌「歌撫村」にも用いられていたように、のどかな遊宴を繰り広げる多くの民の姿が、平穏な治世を享受していることを暗示しているのであろう。

「長尾山」の歌では、詞書の「行旅人」が「諸人」である。「(道が)長し」と「長尾山」が掛けられており、道の行く末の長さに治世の永遠が暗示されている。

「高田郷」の歌では、「諸人」は詞書の「村人」である。多くの村人が「とみくさ」を手に摘み持ち、振りながら行く姿を詠む。この「とみくさ」も実体は不明であるが、⁽⁸⁾「諸人」が「とみくさ」を手に摘み持ち、振りながら行く姿は、

かすがののわかになつみにや白妙の袖ふりはへて人のゆくらむ

(古今集・春上・二二一・紀貫之)

と同様に、平穩な治世を象徴する風景なのであろう。

これらの屏風歌は、当然ながら風俗歌に比べて、「諸人」の描写が具体的である。諸人は、万歳の井の水を汲むことによつてそれが不尽の水であることを確かめ、山吹崎で団居することによつて黄金の花を見出す。また、長尾山を旅することによつて行く末が遙かなることを知り、高田郷では富草を摘み持ち、常世を体現している。それぞれの「諸人」の行為が、治まれる世の発見や証言につながっていく。風俗歌よりもさらに具体的な行為によつて、治世の繁栄は証言され、寿がれる。

大嘗会和歌は「諸人」の織り成す風景としては典型的な和歌群である。大嘗会和歌における「諸人」の用例を読んでみると、「諸人」が織り成す風景、「諸人」のことばが果たす役割が少し見えてくるように思う。それは典型的な祝祭の風景であり、「諸人」はその数や行為によつて天皇が治める世の平穩、繁栄を証立てる一つの景物として機能しているのである。

三 『文治六年任子入内屏風和歌』と「諸人」

次に、藤原兼実が娘任子の入内に際して催した『文治六年任子入内屏風和歌』を取り上げてみたい。⁽⁹⁾ここには九例の「諸人」の用例が見出せる。九例のうち四例は行事題において用いられ、四例は詞書に⁽¹⁰⁾「人」「人人」とあるものを用いられている。

まず、行事題の四例を次に掲げてみよう。

小朝拝列立の所

たちそむる雲井のはるはもろ人の袖をつらぬる庭にみえけり

(藤原良経)

河竹の千世をこめたる庭にいでておきふしきみをいはふもろ人

(藤原隆信)

会坂関に駒迎に行向所 しみづあり

あふさかのせきの清水にもろ人のこまむかへゆくかけぞうつれる

(藤原実定)

五節参入の所

さ夜ふけてとよのあかりのもろ人のをとめむかふる雲のかよひぢ

(藤原良経)

「小朝拝」は元日清涼殿にて殿上人が天皇に拝賀する儀式である。「諸人」を用いた右の二例を含めて、他の用例もおしなべて清涼殿の庭に殿上人が袖を連ねて立つ有様を詠んでいる。歌題の「列立」じたいが、大勢の人が並び立つの意味を示しており、またおそらくは屏風絵にも殿上人が群れ集って天皇を寿ぐ風景が描かれていたのだろう。藤原兼実の「ほしをつらぬる雲のうへ人」、宮内卿の「色色につらなるそで」、藤原定家の「まづたちわたる雲のうへ人」、藤原俊成の「むらさきのそでをつらぬる」の表現も、「諸人」の話は用いていないものの、「諸人」と同じく、群臣を表したものである。「小朝拝」という晴儀の場において、大勢の家臣が天皇を寿ぐ。前章で見た大嘗会和歌よりもっと直截的で具体的な「諸人」の寿ぎの風景である。『堀河百首』に見える立春詠、

庭もせにひきつらなれるもろ人の立ゐるけふや千代の初春

(堀河百首・立春・源俊頼)

は、「朝賀」の儀式かもしれないが、ここでも元日に庭に所狭しと立つ公卿の姿が「もろ人」の語によって表現されている。『文治六年任子入内屏風和歌』は屏風和歌、『堀河百首』は非屏風和歌であるが、描かれる風景に大差はない。

「駒迎」の場面では、天皇に献上される馬を逢坂関まで迎えに行く公卿の姿が「もろ人」と表現されている。ここで

は、他の多くの歌人が馬を中心に詠んでおり、実定の詠みぶりはやや特異である。「駒迎え」もまた、古代的な天皇支配の構造を象徴的に表す儀式であり、ここでもまた「諸人」は天皇に仕える臣下の群として表現されているのである。「五節参入」では、兼実以外はみな「乙女子」を中心に詠んでいる。良経詠の「もろ人」は、舞姫を迎える公卿たちである。

以上四例の「もろ人」は、いずれもその場面の中にいるべき人々、つまり群臣を指している。

次に、詞書（絵柄の説明であろう）に「人人」「人」とある「諸人」の用例を掲げてみよう。

野花盛に開けて人人集まりたる所

おしなべて花に心はいりにけり野辺の千種をわくるもろ人

（七月・野花・藤原定家）

もろ人の千種のはなのいろにあへる心心を野辺にみるかな

（七月・野花・藤原俊成）

人家池辺に人人翫月所

池水にのどけき月をうつしもてこころはれたるやどのもろ人

（八月・月・藤原俊成）

網代に人あつまりたる所 あま人しほやなどあり

もろ人の日をへて絶えぬあじろかなほかにこころをよせずや有るらん

（十月・網代・宮内卿）

いずれも画中に描かれた人々を「もろ人」と表現している。しかし、同じ詞書のもとでも右の例以外は「諸人」という語を用いていない。詞書は歌人に一様に与えられていたのかどうか、絵は実際見ていたのかどうか等といった、確かな詠歌事情は不明なのだが、もう少し具体的に歌を詠んでみよう。

まず、「野花」の場面であるが、藤原兼実の「みわたせば千種のはなのひもとけてこころやらるる秋ののべかな」、藤原良経の「あきののちくさのいろをわがやどにこころよりこそうつしそめつれ」などは、秋の野を訪れている画中人物の視点になって詠んだものであろう。つまり、「諸人」の視点に立っているために、人々は「諸人」という語で

相対化されることはないのである。これに対して右に掲げた定家・俊成詠は、「人人」を「もろ人」として画中の景物の一つとして対象化しているのではないか。藤原隆信の「宮古人千草ながらにうつしうゑば野辺にはのこる花やなからん」は、詞書の「人人」を「宮古人」と表現している。

「月」の場面では、「人人」を「諸人」として歌に詠みこんだのは俊成のみで、他の歌人は池水に映る月の光を中心に詠んでいる。季経が同題で「池水にくもみのそらをうつしもて手にとるばかり月をみるかな」と詠んでいるのは、情景はほぼ同じであるが、主体は対照的である。つまり、俊成は月を賞玩する人々を「諸人」として相対化し、季経は画中人物の「諸人」になりきっているのである。

「網代」の場面では、宮内卿が網代に寄り集う人々を「諸人」と表現している。ただし、藤原定家も「諸人」という語は用いていないが、「事とふ人のたゆるまぞなき」と詠み、群衆を表現している。

逆に、詞書に「人々」とあっても、つまり屏風絵に人々の姿が描かれていても、誰も「諸人」とは表現していない場合もある。例えば、「六月・山井納涼 山井の辺に人々納涼したる所 泉あり」、「九月・紅葉 山野 人家に紅葉盛にしたる所、人々翫之」である。「六月・山井納涼」では、人の数は誰も問題にしていない。「九月・紅葉」も人の数を問題にした表現は見当たらない。

以上、『文治六年任子入内屏風和歌』の「諸人」の語を用いた用例を見てきたが、おそらくいずれも画中に多くの人物が描かれていた画面だったのであろう。そのうちの約半数は行事題である。

『文治六年任子入内屏風和歌』以前の屏風歌において、「諸人」という語が用いられた形跡はない。それはどうしてなのだろうか。まずその理由として想像されるのは、群衆を描いた屏風絵が少なかったのではないかとということである。ここで少し屏風和歌を遡って見てみたい。残されている月次屏風歌の詞書を見ると、目立つのは「男女」「男」「女」「人」「旅人」といった、一人か二、三人の人物である。平安時代には群衆を描く屏風絵じたいが少なかったのか

もしれない。しかし、詞書に「人人」といった複数の人間を表す表現を持つ屏風歌もないわけではない。ここで、一つの手がかりに過ぎないが、「人人」に代表されるような、人の群れを表す詞書を持つ屏風歌を挙げてみよう。

まず、『貫之集』から、画中に複数の人物が絵に描かれていたと思われる屏風和歌を取り上げてみよう。

「天慶二年閏七月源清蔭屏風歌」には一例見出せる。

正月元日人人遊びしたる所の庭にむめの花さけり

老いらくも我はなげかじ千世までの年こんごとにかくてたのまん

(貫之集・三九六)

この歌の「我」は画中の庭の梅花をめぐる人であろう。つまり「遊び」に興じる「人々」の一人である。

同じく『貫之集』の「天慶四年正月藤原実頼屏風歌」の例を掲げてみよう。

人の家にまらうどあまたきて、柳さくらのもとにむれゐてあそびするに、花ちりまがふ

青柳の色はかはらで桜花ちるもとにこそ雪はふりけれ

(貫之集・四五九)

男女の木のもとにむれゐたる所に、舟にのりてわたる人あるが、およびをさしてもいへるやうなり。その

さま郭公をきけるに似たり

かのかたにはやよぎよせよ郭公道になきつと人にかたらん

(貫之集・四六二)

人人秋の野にあそぶ

秋の野の萩に錦は女郎花立ちまじりつつおれるなりけり

(貫之集・四六四)

女どもの池の辺なる対にむれゐて水の底をみる

月影のみゆるにつけて水底を天つ空とや思ひまどはむ

(貫之集・四六五)

人人舟にのりて、網代にいけり

さをさしてきつる所は白波のよれどとまらぬあじろなりけり

(貫之集・四六七)

詞書の「まらうどあまたきて」「男女の木のもとにむれるたる所」「人人」「女ども」「人人」はいずれも画中に複数の人物が描かれていることを思わせるが、しかしいづれも複数の人物を表すようなことばは用いられていない。おそらくは画中人物になりきって詠まれていると思われ、視点は「人人」の中にある。四五九番歌は、柳・桜の下で遊ぶ人々、四六二番は木下に群れている男女、四六四番は野遊びする人々、四六五番は池の辺の対屋に群れている女たち、四六七番は舟遊びして、網代に辿り着いた人々の視点によって、絵画中の風景が描写されている。自分たちの姿を客観的に表現した例は一例もない。

同じく『貫之集』の「天慶五年九月内裏屏風歌」からも引用してみよう。

梅花のもとに男女むれあつ、酒のみなどして、花ををりてうちなる人のやれる

まれにきてをればやあかぬ梅花常にみる人いかがとぞ思ふ

(貫之集・五二〇)

これもまた画中人物になりきって、その心中を詠んだ歌である。

以上、『貫之集』の屏風和歌から、画中に複数の人物が描かれていたであろうと推測される歌を見てきたが、詞書にある「人々」等の存在をことばで表現した例は見当たらない。また、群衆が描かれる画面は、酒宴、遊宴を描いたものが多い傾向があることに気づく。

群衆が描かれていたと推測される屏風和歌は、『元輔集』の「永観二年藤原頼忠家屏風歌」にも三例見出される。

神のやしろに人々あまたまいる

はるがすみたちもなそひそ人しれずいのりなすべき神のいがきに

(元輔集・一一四)⁽¹¹⁾

三月、桃の花あるところ、船にのりて人々あそぶ

三千年に咲くてふ桃の花ざかりいくたび波もおらむとすらむ

(元輔集・一一五)

六月、泉ある家に、うへきのもとに酒のむ人々

いはまわけゆく水さむみながるれば木のした風もすゞしかりけり

(元輔集・一一八)

これらもまた『貫之集』と同様、舟遊びや酒宴の歌が多い。そして、『貫之集』同様、「諸人」の語は用いられない。その他、

天曆御時屏風に、七月七日はしに人人いでゐてながめたり

あふほどはわかれしのちもたなばたのおもひはるべきひまもなきかな

(頼基集・二九)

九月、しがの山越の人人

山おろしの風にもみぢの散る時はさざさど浪ぞまづ色づきにける

(順集・二三四)

花の木の本に人人あそぶ、やり水のもとにやまぶきさけり

山吹の花のした水さかねどもみなくちなしとかげぞみえける

(順集・二八〇)

なども、画面に複数の人物が描かれていたことが推測される屏風和歌であるが、ここにも画面の人々を「諸人」等の語で表現した例は見られない。

以上群衆を描いた画面と推測される屏風和歌を見てきたが、画面に描かれていたであろう「人人」をことばで表現した例は一例もない。それは、一つには、画面に描かれた「人人」の視点で詠んでいるからであり、『文治六年任子入内屏風和歌』の例のように「諸人」と客観化しないからではないだろうか。

中世になると絵画に人物系の景物が増加する。『文治六年任子入内屏風和歌』の「諸人」の用例の多さは、そうした絵画したいの中世的性格を反映するものである。また、群衆を描く画面には年中行事の絵が多い傾向がある。その点では『文治六年任子入内屏風和歌』の「諸人」の用例も半数は年中行事の画面に用いられており、例外ではない。そして、いずれの用例も祝賀性が強く、年中行事の根底には祝賀性があることを示している。また、この祝賀性という点では、『大嘗会和歌』の「諸人」の用例に通じるものがある。

以上のように、絵画じたいに「諸人」が詠まれる原因が求められるということを目指したうえで、さらにもう一つ、屏風和歌を詠むときの主体の問題についても提起しておきたい。前述のように、平安時代の屏風絵にも群衆を描いた絵はあった。しかし、そうした場合、詠歌主体は画中人物にあるために、客観化しないのが通常だったのではないか。『文治六年任子入内屏風和歌』では、そうした詠法とは異なる詠み方がなされていたのではないだろうか。つまり、屏風の絵の人物を客体として詠むという方法である。このことは鎌倉時代のいわゆる写実主義の傾向と関わるのではないかと、予測を持っているのだが、この点については再考を期したい。

四 和歌における「諸人」の用例

以上、「諸人」が用いられる典型的な用例を二つ取り上げてきたが、ここでは和歌における「諸人」の用例をあらためてたどってみよう。その用例は古く『万葉集』にさかのぼる。

烏梅能波奈 乎利弓加射世留 母呂比得波 家布能阿比太浪 多努斯久阿流倍斯

(万葉集・卷五・雑歌・八三二・神司荒氏稻布)

宇梅能波奈 乎利加射之都々 毛呂比登能 阿蘇夫遠美礼婆 弥夜古之叙毛布

(万葉集・卷五・雑歌・八四三・土師氏御道)

これらは、春の遊宴の風景を詠んだもので、先述の『兼盛集』一五四番歌と同じく、「多努斯久(楽しく)」という酒宴専用の言葉を用いていることから、酒をとまなう宴であったことが想像される。「諸人」の語が有する祝祭性が、『万葉集』の用例に既に見ることができるのである。この万葉歌における「諸人」の用例は、「大宮人」に近い。

百磯城之 大宮人者 暇有也 梅乎挿頭而 此間集有

(万葉集・卷十・春雑歌・一八八三・作者未詳、新古今集・春下・一〇四)

山辺赤人・「梅」が「桜」、「此間集有」が「けふも暮らしつ」

「大宮人」は『万葉集』には多数の用例があるが、その後はあまり用いられなくなることばである。それに対して「諸人」は、『万葉集』以後、勅撰集ではさほど用例数は増えないものの、新古今時代の歌合等において用例が増加する傾向を見せている。まず勅撰集（八代集）の用例をたどってみよう。初出は『拾遺集』の二例で、その後は『後拾遺集』と『金葉集』に各一例（初撰二度本にも一例）、『千載集』『新古今集』に各一例と、さほどその数に大きな変化は見られない。八代集の用例の中には、「諸人」に官位を超されるといった、自らの不遇を訴える歌が三例もあることが注目される。次に私家集はどうかというと、『能宣集』の一例、『高遠集』の二例あたりが古く、その後、『入道右大臣頼宗集』、『出羽弁集』に各一例、『為仲集』に二例、『国基集』、『康資王母集』に各一例、『江帥集』に二例と、さほど多用された形跡はない。それが、新古今歌人の家集となると、俊成の『長秋詠草』に四例、定家の『拾遺愚草』に十四例、慈円『拾玉集』に二十四例、良経の『秋篠月清集』には前述したように六例、家隆『壬二集』に八例と、かなりの用例数にのぼる。ただし、後鳥羽院は二例と少ない。では、百首歌ではどうかであろうか。

まず『堀河百首』には四首の用例が見出せる。

庭もせにひきつらなれるもろ人のたちゐるけふや千世の初春

（立春・俊頼）

もろ人のかざす葵はちはやぶる神にたのみをかくるなりけり

（葵・肥後）

もろ人のすくふてふなる蓮葉のおもひしれとやうき沈むらん

（蓮・河内）

さかき葉にゆふしでかけて諸人のときはにのみもあそぶべきかな

（神楽・紀伊）

俊頼詠は元日の公卿列立の風景、肥後詠は賀茂祭、紀伊詠は神楽と、いずれも祝祭的要素を持つ年中行事詠である。河内詠は釈教歌で、仏に対する衆生としての「諸人」である。「諸人」が向かい合う相手は、神が二首、仏と天皇が各

一首で、天皇に向かい合う「諸人」を詠んだ俊頼詠も祝意性はさほど強くない。

『六百番歌合』の歌題構成に影響を与えたと言われる『永久百首』にも四首の用例が見出せる。

もろ人のはなみんはるのはじめとやけふはおもひのひらけぬるかな

(元日・大進)

あづさ弓はるの日ぐらしもろ人の上に入るまでもあそびつるかな

(賭弓・大進)

をとこ山みねのさくらにもろ人のかざしの花をたぐへてぞみる

(石清水臨時祭・兼昌)

もろ人のあそぶなるかな乙女子がかざみのすそのながき夜すがら

(五節・常陸)

四首中三首が行事題の歌である。行事題三首の中の二首が「あそび」の語を用いている。また兼昌詠は前掲の万葉歌「百磯城之」をふまえており、大進詠も元日詠とはいえず、「諸人」の花見を詠んだものである。このように四首ともに祝祭を題材とした歌であるといえよう。しかし、いずれもあくまでも遊樂の景であって、天皇を寿ぐ祝意性はまだ顕著ではない。

『為忠後度百首』の用例五首はすべて行事詠である。

もろびとのけふみなかくるもろかづらあまねきかみのしるしなりけり

(賀茂祭・俊成)

ゆだちとていてのもろびともつけてすずのいたづきまづならすなり

(射場始・為忠)

もろびとやまばがけからであづさゆみひくころもでさえわたるらん

(射場始・為業)

もろびとのこころもはれてあそぶかなひかけさしそふとよのあかりに

(五節・為盛)

ひめこまつはやすみぎりにもろびとのかざしのはなをさしそふるかな

(臨時祭・為忠)

いずれも年中行事に寄り集う群衆が「諸人」として表現されているが、『永久百首』と同様にのどやかな風景が多く、まだ天皇への寿ぎの意は強く打ち出されているとは言えない。

このように、『堀河百首』『永久百首』『為忠後度百首』の三種の百首歌に見える「諸人」の用例は、圧倒的に年中行

事に集中している。そこには諸人が集う祝祭的風景が浮かびあがってくるのである。しかし、大方の傾向としては、神、仏に向かい合う衆生という用例も多く、天皇に向かい合う民衆、貴族達の意味に用いられている場合でも、寿ぎの意や祝意性はまだ希薄である。

では、新古今時代の百首歌はどうであろうか。

『六百番歌合』は、先の良経詠を含めて六例である。

あらたまの年をくもゐにむかふとてけふもろびとにみきたまふなり

(元日宴・良経)

もろびとのたちゐる庭のさかづきにひかりもしるし千代のはつ春

(元日宴・家隆)

あづさゆみはるのくもゐにひきつれて気しきことなるけふのもろ人

(賭射・家隆)

もろ人のかりばのをのにふるあられけふのみゆきにたまぞしきける

(野行幸・家隆)

もろ人の名さへききつることよひかなこれもこん世のほとけならずや

(仏名・有家)

これやこの三世のほとけももろ人もなをあらはしてあくるしののめ

(仏名・兼宗)

「元日宴」「賭射」「野行幸」「仏名」と、六首全てが年中行事である。天皇のもとに寄り集う群臣が「諸人」と表現される。これらがもし「月次絵」であったならば、絵に群衆が描かれていた場面であろう。ここで注目したいのは、家隆の三首である。「ひかりもしるし千代のはつ春」「気しきことなるけふの諸人」「けふのみゆきにたまぞしきける」は、いずれも天皇への祝意が明確に詠み込まれている。また、良経詠の「けふ諸人に御酒たまふなり」は、天皇が主体に据えられ、天皇から下賜される酒を受ける諸人という関係が示される。これまでに見られなかった天皇への祝賀の意が、明確に詠まれるようになっていいる。

『正治二年初度百首』は六例である。

諸人をはぐくむちかひあらはれてわしこそ峰の名にはおひぬれ

(鳥・守覚法親王)

もろ人の祈る千とせをあつめても猶数しらぬはるのはつ空

(春・通親)

もろ人のおのおの千世とおもふらん君がよはひのすゑのはるけさ

(祝・季経)

もろ人の花色ごろもたちかさね宮ごぞしるき春きたりとは

(春・定家)

あづさ弓ともやたばさみ諸人のおのがひきひきいどむなるかな

(春・生蓮)

もろ人の衣のすそを引きかへてひとへにみゆるしらがさねかな

(夏・静空)

題だけではそれと知られないが、生蓮(師光)詠は賭弓、静空(実房)詠は更衣を詠んでいる。通親詠と定家詠は立

春(元日)、通親詠はさらに賀歌でもある。季経詠も賀歌である。守覚法親王詠は釈教歌であり、絶対的個である仏に

対する衆生として「諸人」が用いられている。守覚法親王詠を除くと、二首が行事詠、一首が祝賀詠、二首が元日詠

(二首は祝賀詠でもある)と、晴儀性の強さが窺える。また、通親詠は「もろ人の祈る千とせ」、季経詠は「もろ人の

おのおの千世とおもふらん」と、ここでもまた天皇への祝意が表面に打ち出されている。

『正治二年後度百首』は十首の用例数にのぼる。

雲のうへにこれや春たつしるしなる袖をつらぬるけふのもろ人

(公事・後鳥羽院)

もろ人のみたらし川にするがまひ雲ゐにかへるあかつきのこゑ

(公事・後鳥羽院)

諸人のたちゐる袖のおとさえてたましく庭に春のはつ風

(公事・具親)

暮がたのかずのあまりを袖にかけてあかぬ木かげをかへるもろ人

(宴遊・長明)

もろ人のなほあらたむるあしたこそ心の春のはじめなりけれ

(公事・長明)

こよひはと月にちぎればもろ人のながめや空にむすぼほるらん

(宴遊・季保)

諸人のかはりてわたるかずみえておろしのみつきすゑとほるなり

(公事・季保)

もろ人の浪にうかぶるさかづきに君がちとせのかけぞさしそふ

(あそび・越前)

なにとなく心やりたる諸人のけしきに見ゆる君が御代かな

(あそび・越前)

もろ人の雲みの庭にうちむれてをりふし君をいはふ初春

(公事・越前)

六首が「公事」つまり行事題、残りの四首が「宴遊」「あそび」題である。いずれも貴族が群れ集う祝祭的場面に用いられている。ここでは、越前の三首が天皇への祝意を明確に詠み込んでいる。『後鳥羽院御集』の二首の「諸人」の用例は、この折のものである。

『千五百番歌合』は五例である。

おしなべてけさは霞のしきしまややまともろ人春をしるらむ

(春一・良経)

あふひ草たのみをかくるもろびとのしるしはいつかみあれなるべき

(夏一・小侍従)

いく秋のためしをかひくもろ人のゆきあふさかのもちづきの駒

(秋三・季能)

もろ人のふたごころなくあふぐかなはこやの山に身をまかせつつ

(祝・有家)

もろ人のあふぐのみかはきみが代はそらによるこぶ雲もたちけり

(祝・通親)

「賀茂祭」「駒引」と行事題が二首、「立春」題が一首、残りの二首は「祝」題である。ここにも祝祭性が色濃く窺える。また、季能詠、有家詠、通親詠はいずれも天皇への祝意が顕著で、「諸人」はまさに天皇に仕え、寿ぐ人々として用いられている。

以上、和歌における「諸人」の用例をたどってみた。用例数は新古今時代の歌合等に急増しており、和歌史における群衆の登場ともいふべき現象である。藤原定家などの廷臣歌人に多く、後鳥羽院の用例は少ない。詠まれる歌は、行事詠が圧倒的に多く、祝祭性を色濃く有している傾向が明確である。そして、『為忠後度百首』までは天皇への祝意はさほど明確ではないが、『六百番歌合』以降の新古今時代の百首歌には天皇への祝賀の意を顕わに詠み込んだ例が増加している。つまり大方の傾向としては、平安時代までの「諸人」は平穏な世を象徴するような、のどやかな遊宴に

寄り集う群衆であったが、『六百番歌合』あたりから天皇を寿ぐ万民という用例が登場するようになる。その点では、大嘗会和歌の「諸人」に非常に近い用法なのである。

しかし、これほど新古今時代の百首歌などに数多く詠まれながら、『新古今集』に「諸人」の用例は一首しかない。しかも、それは、慈円の神祇歌である。

もろ人のねがひをみつのはま風に心すずしきしでのおとかな

(新古今集・神祇・一九〇四・慈円)

この場合の「もろ人」が対する絶対的個は、天皇ではなく、日吉の神である。

五 「諸人」の景

森朝男氏は「景としての大宮人―宮廷歌人論として」で、宮廷歌人らの儀礼歌にしばしば「大宮人」が描かれることを指摘し、「大宮人の様子を歌えばそれがそのまま、行事の本主である天皇への寿ぎ歌となったのである」と言う。⁽¹²⁾ こうした大宮人の叙述法を「景としての大宮人」と呼び、「ハレ」の祭式空間の最外縁部である宴に参加する大宮人を讃えることによって、祭祀空間を外側から讃えるという構造になっていることを指摘する。「大宮人」は、『万葉集』での用例は多いが、八代集では減少する。用いられる場合でも、多くは前掲の「百磯城之 大宮人者 暇有也 梅乎 挿頭而 此間集有」(万葉集・卷十・春雑歌・一八八三・作者未詳、新古今集では「ももしきの大宮人はいとまあれや 桜かざしてけふもくらしつ」)を下敷きにしているようである。「諸人」もこの「大宮人」に近い祝祭性を有している。大嘗会和歌や年中行事の和歌に多く用いられるという傾向も、その表れであろう。しかし、この二つの言葉は必ずしも同じというわけではない。「諸人」は「大宮人」よりも、数の多さと遍く全ての民という意味が強調されており、そのことが寿ぎにつながっているという用例が多い。

『文治六年任子入内屏風和歌』に群衆を描いた屏風絵が多かったであろうこと、それを「諸人」ということばでしば

しば表現していることは先述した。この例に限らず、鎌倉時代の絵画には人事系の景物が増加したという。公儀復興のために後白河院が作らせた『年中行事絵巻』には、現存する多くの画面で群衆の姿が景物として描かれている。個々の顔が見えない群れとしての人である。院政期から中世にかけての絵巻において、群衆が描かれる画面は明らかに増加している。佐野みどり氏は、そうした絵巻の群像が人間社会の公分母となっており、祝祭や儀礼・戦さといった非日常の情景は、典型的であることが積極的に求められ、典型的であることによって、イメージの衝迫力もいや増すのだと指摘する。本来ある特定の行事の記録であった行列の図様は、その聖性の記号性ゆえに図様の伝統を作り出し、またにぎわい蝟集する群衆のエネルギーは、祝祭のコードを画面に持ち込んでいると言う。⁽¹³⁾

また、説話においても中世になるとしばしば群衆が描写されるようになる。小峯和明氏は、「ひしめく」という語が、古代にはほとんど用例がみえず、院政期あたりから使われ出し、中世にはかなり用例が多く、一般に定着していくと指摘する。⁽¹⁴⁾「ひしめく」は、大勢でがやがや何かやっている状態、集団でごったがえしている様を表す、集団の動きへの視線のことばである。ごったがえした光景は別に古くからあったものだが、情景をとらえ、表現しようとする視線の向け方が問題であると言う。説話の中では『宇治拾遺物語』に最も用例が多く、絵巻物にもその傾向が見られることを指摘したうえで、「ひしめく」を中世を象徴することばの一つととらえる。

こうした、中世の絵画や説話において群衆が意図的に描かれるようになる傾向と、和歌において「諸人」のことばが多用されるようになる傾向とはどこかでつながっていないだろうか。和歌における群衆をあらわすことばである「諸人」も、中世に用例が増加する。「諸人」じたいは、「ひしめく」のような喧騒、猥雑といった「猿楽」的要素は持ち合わせておらず、『年中行事絵巻』の群衆が示すような、聖性や祝祭性の性格に近い。しかしいずれも、大勢であること、集団であることに変わりはなく、中世における「集団や群衆へのまなざし」⁽¹⁵⁾を背景としている点では共通するものがあるのではないだろうか。これまでももちろん群衆は存在していたが、群衆を群衆として表現することが少な

かった。群衆を群衆として、あえてことばにして表現するところに、このことばの意味があるのだ。以前からあった実景をことばにして表現してゆく行為は、やはりその風景に何らかの意味を見出したからこそ生まれたのであろう。院政期から中世にかけて、和歌における「諸人」は祝祭性や聖性といったコードを有することばとして認識されていたのではないだろうか。このことは、「諸人」の語が神や仏に相對するときにもしばしば用いられることから推測される。「諸人」が相對する絶対的個は、神であり、仏であり、天皇である。しかも、新古今時代の和歌においては、天皇に相對する「諸人」の用例は、その数としては圧倒的に神仏を凌駕しているのである。

また、「諸人」の語は、数の多さだけではなく、特異な個の存在を浮き立たせるような普通、世間一般という意味をも含むであろう。神仏や天皇はもちろん、勅撰集に多く見られたような、自分と區別されるころの世間一般の人々という意味での「諸人」の用例などは、そちらの意味のほうが強いかもしれない。世間一般、衆人としての「諸人」が、特異な存在としての個を浮かび上がらせるのである。「諸人」の語が持つ祝意性は、その数だけではなく、その質にも由来しているのであろう。

ここで、冒頭に引いた『六百番歌合』の「元日宴」に戻ってみよう。『六百番歌合』の歌題に、年中行事題が多く含まれていることは、夙に指摘されてきたところである。「元日宴」「賭弓」「三月三日」「賀茂祭」「乞巧奠」「九月九日」「野行幸」「仏名」の八題を数える。このうちの五題は『永久百首』と一致する。文治六年に催された任子入内屏風和歌も多くの行事題を含むが、同じ九条家を舞台にした和歌の催しでも『六百番歌合』とは一つも重複しない。意図的に重複を避けたのか、それとも催しの目的の違いによるものなのか。『六百番歌合』の行事題の歌は、宮中を舞台にしたものが多く、祝賀の意味が詠み込まれており、その祝賀の宛先は天皇である。

『六百番歌合』は「元日宴」に始まり、十二名中六名が天皇から下賜される酒を詠んでいる。その一番左は、良経の「諸人」の寄り集う元日の風景を詠んだ歌であった。その「諸人」に天皇は酒を下賜する。元日宴という晴の場での君

臣和楽の風景は、まさに「諸人」の典型的な風景であり、当時の良経をはじめとする貴族たちが永続することを望んだ理想的な風景だったのである。この時点で既に「諸人」の語は、祝祭性や聖性を表すコードを有することばとして用いられ、受け止められていたのであろう。

しかし、先述したように、新古今時代の歌合などにあれほど詠まれていた「諸人」の歌は、『新古今集』には全く入集していない。後鳥羽天皇の用例の少なさと関わるのか、それとも「諸人」の語が『新古今集』にはなじまないものだったのか。八代集の「諸人」の用例中、個人的な述懐を述べた歌が多く入集し、万民が天皇を寿ぐ歌は、『金葉集』初撰二度本に俊頼の『堀河百首』詠が見えるのみである。場ということでは、晴の場の「諸人」の歌は入集せず、褻の場の「諸人」の歌の方が入集している。しかし、歌を詠む意識としては、晴の祝祭空間で詠まれた歌は類型性の方が重んじられ、和歌作品としては褻で、述懐歌の方が晴ということになるのである⁽¹⁷⁾。或いは、万葉歌の原点は宴遊にあると言われており、そうした古代和歌に特徴的な「諸人」が寄り集う宴遊の風景は、勅撰集の世界、王朝和歌の世界からは排除される傾向があったのだろうか。王朝和歌に酒宴を詠んだ歌が少ないということと関わるのかどうかはわからないが、非常に大雑把な言い方をすると、群から個へとたどってきた王朝和歌の道のりからすると、「諸人」の景は古代的な、ある種の歌垣的世界をひきずるものと見なされる傾向があったのかもしれない。しかし、新古今時代の百首歌などには多数詠まれていたわけで、歌合や歌会の場と勅撰集の世界の差のようなものを考えるべきなのかもしれない。また、勅撰集でも、先述の良経の『千五百番歌合』の「諸人」詠は『統拾遺集』に入っており、『古今集』以後はこうした祝祭の場での「諸人」の歌が入集するようになっていたことを付け加えておきたい。

本稿では、和歌における「諸人」の一語に焦点をあてて考察を進めてきたために、多々遺漏もあるかと思う。こうした和歌における「諸人」の用例は、詩文、散文における「諸人」の用法と比べて特異なのだろうか。こうした点についても、大方の御批正を頂いたうえで、今後の課題としたい。

注 (1) 和歌本文・詞書の引用は、特記しないかぎり、『新編国歌大観』（角川書店）による。

(2) 久保田淳・山口明穂校注『新古典文学大系 六百番歌合』（平成十、岩波書店）は、「御酒」について「和歌に用いられることは少ない」、俊成判については「ここで『持』としているのは、左の歌に対する判者藤原俊成の低い評価を暗示するか」と注している。

(3) 「元日宴」の由来と次第については、倉林正次『饗宴の研究』（昭和四十、桜楓社）、山中裕『平安朝の年中行事』（昭和四七、塙書房）、遠藤元男・山中裕『年中行事の歴史学』（昭和五六、弘文堂）、山中裕・今井源衛『年中行事の文芸学』（昭和五六、弘文堂）、山中裕『平安時代の古記録と貴族文化』（昭和六三、思文閣）などに詳しい。『日本書紀』朱鳥元年（六八六）春正月二日の記事に見えるのが、史料としては最初である。和歌の題としては珍しい。酒席の和歌については、上条彰次『中世和歌文学論叢』（平成五、和泉書院）、久保田淳「酒の歌、酒席の歌」（『文学増刊号 酒と日本文化』平成九、岩波書店）に論考がある。久保田氏は平安以降の和歌に酒の歌が極めて乏しいことを指摘し、数少ない用例の一つとして『六百番歌合』「元日宴」の良経詠を掲げている。

(4) 「たのしき」は酒宴専用の語である。

(5) 『大嘗会和歌』については、秋山光和氏の紹介（初出は『美術研究』一一八号・昭和一六、『平安時代世俗画の研究』昭和三九所収）以来、分析が進められてきた。藤田百合子「大嘗会屏風歌の性格をめぐって」（『国語と国文学』五五の四、昭和五三・四）は、選ばれた地名が単なる名所歌枕とは異なり、地名じたいに祝言の意味を含み持つものが多いことを指摘している。地名を物の名のように歌に詠み込むことによって、自動的に祝意を表せるのである。つまり、地名を選んだ時点で、詠むべき歌の方向性が規定されているということになる。『大嘗会和歌』の本文は、仁明天皇から後花園天皇までの時代の歌を収める書陵部蔵『大嘗会悠紀主基和歌』（五〇二・一五）によるが、誤写と思しき箇所も少なくない。冷泉為相の書写と目される、仁明天皇から後嵯峨天皇までの歌を収める伝本が、平成一四年一月刊行開始予定の第五期『冷泉家時雨亭叢書 大嘗会和歌 文保百首 宝治百首』（朝日新聞社）に収録予定とのことである。

(6) 稲の異名については、佐藤明浩「稲の名を詠んだ和歌」（『古代中世和歌文学研究論集 第三集』平成一三、和泉書院）、同『和歌初学抄』物名『稲』の窓から」（『講座 平安文学論究 一五』（平成一三、風間書房）に詳しい。

(7) 八木意知男『大嘗会和歌の世界』（昭和六一、皇學館大学出版）。

(8) 注(6)の佐藤明浩「稲の名を詠んだ和歌」（『古代中世文学研究論集 第三集』平成一三、和泉書院）は、この歌を掲げて『乙帖三四月』に当たり、ここで摘まれている『とみくさ』も稲ではないと判断される」とする。

(9) 谷知子「文治六年壬子入内屏風と和歌」（フェリス女学院大学『玉藻』三六、平成一一・五）も参照されたい。

(10) 各歌人には、題に加えて、絵柄を説明したものとと思われる詞書のようなものが与えられていたらしい。絵じたいを実際に見てい

「諸人」の景

たかどうかは不明。その詞書は各歌人の家集によって若干異なるが、引用は藤原良経の『秋篠月清集』による。

(11) 『元輔集』の本文は、『私家集大成 中古I』(明治書院)所収の尊経閣文庫蔵本による。清濁、表記は私意による。

(12) 森朝男『古代和歌と祝祭』(昭和六三、有精堂)。

(13) 佐野みどり「物語絵画における群像表現」(『風流 造形 物語 日本美術の構造と様態』平成九、スカイドア)。

(14) 小峯和明『説話の森 天狗・盗賊・異形の道化』(平成三、大修館書店)、同『宇治拾遺物語の表現時空』(平成一一、若草書房)。

(15) 注(14)前掲書。

(16) 『歌ことば歌枕大辞典』(平成一一、角川書店)の「諸人」の項の記述は、『万葉集』のほかは、概ねこの八代集の「諸人」の用例をもとになされているが、先に述べたように、「諸人」の和歌における膨大な用例の中で八代集の用例はむしろ特異である。

(17) 和歌における「藝」と「晴」については、工藤重矩『平安朝和歌漢詩文新考 継承と批判』(平成一二、風間書房)に詳しい。

(付記) 本稿は、平成二三年一月九日、第二九〇回「東京大学中世文学会」において発表したものである。発表に対して、ご質問、ご教示いただいた方々に厚くお礼申し上げます。